慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

KEIO 150
Design the Future

平成19年度卒業式
医学部89名―社会へ飛び立つ

笹部潤平君が塾長賞を授与

平成十九年度大学卒業式が三月二十四日、日吉記念館で行なわれた。本年度の卒業生は九学部で六、五六八名、うち医学部は八九名であった。式典は開会の辞に始まり、まず西村太良常任理事により、各学部の卒業者数および表彰者数が報告された。次いで、各学部代表者への学位記授与が行なわれ、医学部代表として伊勢美咲君が壇上に上がった。続いて各種表彰が行なわれ、医学部からは大学表彰規程による表彰（首席）として桂井雅子君が、小泉体育努力賞として競走部四名、ゴルフ部十一名が表彰された。そして、大学院医学研究科、笹部潤平君（大学院医学研究科博士課程四年、内81回）が塾長賞を授与された。笹部氏はロ・セリンがALS進行に関与し、治療の標的と成りうること、進行の指標として活用されうることを示した。三四会の取材に際し、笹部氏は「今回の受賞を励みにし、ALSの患者さんの為に研究を発展させていきたい」と語った。

笹部　潤平君

表彰終了後、安西祐一郎塾長が祝辞を述べた。その中で塾長は、卒業生が備えるべき精神としてグローバリズムの精神、民主導の精神、協力の精神の三つを挙げ、義塾で培った精神、学問、出会いを大切に、夢、志、勇気を持って社会へ飛び立って欲しいと結んだ。

次に、上原明・大正製薬株式会社取締役社長が塾員代表として祝辞を、看護医療学部佐藤絵里君が在学生総代送辞を、そして医学部相澤玲君が卒業生総代答辞を行なった。

最後に義塾職員、卒業生、卒後二十五年を迎えた塾員を含む社中一同による塾歌斉唱が行なわれて閉式となった。引き続いて二〇〇八年三田会結束式が同会場で行なわれた。

（四年　堅田侑作・三年　山田茉未子）

華やかに
87回生謝恩会

八十七回生が卒業するにあたり、教職員、保護者に感謝の意を表す謝恩会が、三月二十五日、帝国ホテル三階「富士の間」にて、華やかに行われた。

式は午後七時の定刻より、教職員、保護者らが卒業生の作る花道と盛大な拍手に迎えられて始まった。まず、末松誠・医学部長（医科62回）による祝辞があり、「絶対に手を抜かないで、全力で二年間の研修に励んで欲しい」と、激励の言葉を贈った。そして、比企能樹・三四会長（外37回）より、これから三四会の正会員になる卒業生に祝辞を、さらに戸山芳昭・病院長（整54回）が音頭を取っての乾杯と進んだ。

記念品を贈呈する比企会長㊨と菅沼副会長（中央）

会の途中には、駆けつけた安西祐一郎塾長から、「塾医学部を卒業し、独立自尊の精神を兼ね備えた医師である君たちは特別な存在である。誇りを胸に頑張って欲しい」と激励の言葉を頂いた。また、ポリクリ班単位で、卒業生から一人一言の挨拶が行われ、会場はおおいに盛り上がった。

会の終わりには、比企会長と菅沼副会長より卒業生に記念品が贈呈され、男性にはネクタイ、女性にはスカーフが贈られた。卒業生からの贈り物は、学事課掲示板であり、参会者全員が肩を組んで「若き血」を斉唱した。入場同様に、卒業生の花道と拍手で、教職員、保護者が退場した。保護者の中には、目頭を押さえながら、歩く姿も見られ、参会者全員が六年間を偲ぶ心温まる会であった。

あいさつする学生たち

最後に謝恩会実行委員長の中島大輔君から「八十七回生は新カリキュラム一年目の学年であり、大変なこともあったが、逆にそれによって個性豊かな学年へと成長できたはず。関係者の皆様のおかげで今、こうして卒業することができる。感謝の気持ちを忘れず、これからは医師として仕事に励みたい」と挨拶があり、孝養舎の前に、既に設置されている。

慶應義塾創立一五〇年記念事業
―新病院棟建設決定―

病院長　戸山　芳昭

慶應義塾は今年創立一五〇年を迎えたが、その記念事業が二〇〇五年から十年計画で進められている。日吉キャンパスでは今年複合施設棟が竣工し、その後、新教育棟や記念館などの建設が予定されている。三田キャンパスでは南館別館や未来先導館を含む新校舎建設計画が進んでいる。また、新しい初等中等教育校も二〇一一年には横浜市青葉区内に開設予定である。

信濃町キャンパスでは二十五年前の義塾創立一二五年記念事業において現在ある新棟が建設された。この度の創立一五〇年記念事業では、その一環として世界トップレベルの医学部・病院作りを目指し塾長をリーダーとした「信濃町キャンパス改革・刷新プロジェクト」が昨年四月よりスタートした。本プロジェクトでは高度で良質な「医療」、臨床と一体化した最先端の「研究」、二十一世紀を先導する医師養成を目指した「教育」を柱とした「アカデミック・ホスピタル」を構築すること、同時に経営改革を積極的に推し進めて「プロフィット・センター」としての機能も十分に持ち合わせた慶應医学・病院を築き上げることを目標に協議されてきた。特に昨年十月からは、〔A〕教育・研究に関する検討委員会（委員長：末松誠医学部長〈62回〉）、〔B〕病院経営改革に関する検討委員会（委員長：北原光夫病院経営執行役員〈46回〉）、〔C〕新病院棟・予防医療センター（仮称）の建設・設備・機能関係、新規収益事業、および資金手当に関する基本構想ワーキンググループ（主査：戸山芳昭〈54回〉）、〔D〕先端情報環境整備に関する基本構想ワーキンググループ（主査：栗林幸夫医学部長補佐〈52回〉）の計四つの委員会・ワーキンググループ（WG）がそれぞれ立ち上がった。塾長の強いリーダーシップと各委員、関係者の努力、そして何よりも委員全員の「経営改革を実行して世界に冠たる慶應医学・病院を作ろう」という熱い想いが一つになり、慶應医学の将来像と構造改革、予防医療センター・新病院棟建設等の基本方針が示された。

ご承知のように、新棟を除いた慶應病院の施設は老朽化が著しく、教職員側も患者さん側も一日も早い新病院棟の建設を強く待ち望んできた。この度の創立一五〇年記念事業の一環として信濃町キャンパスに新しい施設が出来ることは、二〇一七年に創立一〇〇年を迎える慶應医学にとってこの上もない喜びであり、これも義塾・医学部等が力を合わせ社中一体となって押し進めてきた成果と感じている。この点は義塾の一員として誇りに思うと共に、強いリーダーシップを発揮し、慶應医学の将来構想実現に向けてご尽力頂いた安西塾長に感謝の意を表したい。

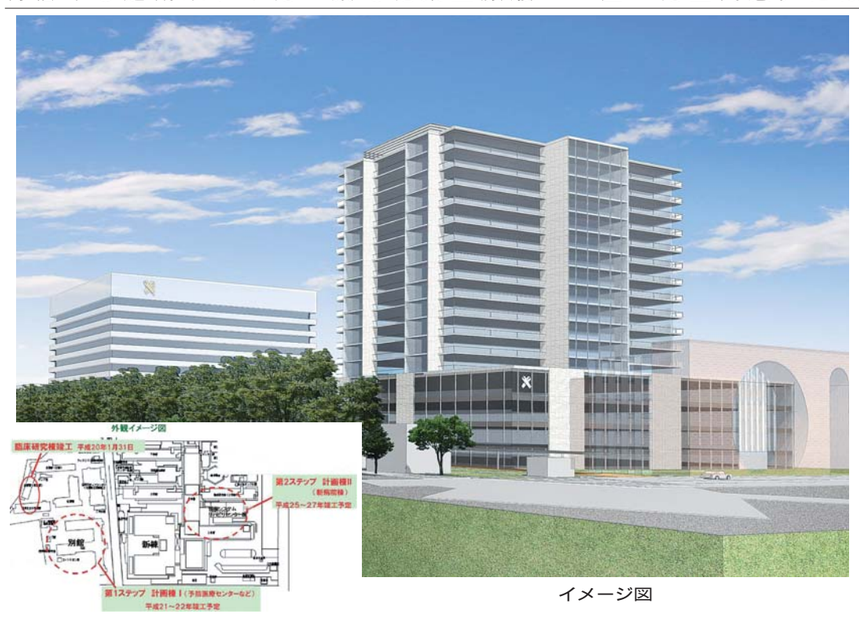
さて、本稿では予防医療センター（仮称）等・新病院棟建設決定に至った経緯について簡単に触れておきたい。予防医療センター構想は平成十五年度のPET導入の提案から始まる。二十一世紀医療の中心は予防医学であり、慶應病院に「健康相談センター」に代わって最新医療機器を備えた新たな予防医療センターの設立が求められていた。この構想が義塾で承認され、当初は別館の南棟と中央棟解体による建設計画が進められた。しかし、この創立一五〇年記念事業の一環として信濃町キャンパス全体の将来構想を検討することとなり、前述した「改革・刷新プロジェクト」がスタートした次第である。医学部でも独自に「信濃町キャンパス将来構想委員会（委員長：森川康英教授〈小児外科：49回〉）」が立ち上がり、慶應医学・医療の将来像に関しての骨子が示された。同時に新たな診療体制の構築として「診療クラスター構想」が議論され、今後新病院棟に配置すべき新たな診療部門等の選考において参考になる構想である。

前述した〔C〕WGの下に、信濃町の医学部・病院執行部を中心とした信濃町WGを同時に立ち上げ、医学部側での検討も頻回に行ってきた。その基本構想は「医学部および病院における全ての構造改革を実行し、収支改善を確実なものとして安定した運営基盤の下に、信濃町キャンパスのグランドデザインを作成する。その一環として予防医療センターと新病院棟の建設を企画し、世界トップクラスの大学病院構築を目指す」とした。主な検討項目は、①総病床数、②新病院棟機能、③予防医療センター機能と併設する病院機能、④新病院棟の規模と建設場所、⑤看護師寮の移転、⑥資金調達などである。また、医学部教授会構成員や一般教職員の方々からも広く意見を求め、医療側・患者側の動線や物流、立地条件、将来性などあらゆる条件を加味し、更には病院建設設計事務所にも分析をお願いして協議を重ねてきた。その結果、図に示すような信濃町キャンパスでの事業計画が一月三十一日開催の「改革・刷新プロジェクト」、二月四日の創立一五〇年記念事業委員会幹事会で承認された。

前号の医学新聞で掲載された臨床研究棟は既に一月三十一日に竣工式を終了し、別館に在籍していた主に外科系臨床教室の多くが今月末には移転完了の予定である。その後は別館を全て解体し、その南側跡地に第一ステップとして予防医療センター（仮称）を建設する、このセンター内には慶應病院1号棟の病棟機能を併設して新病院棟建設時に備える予定となっている。予防医療センター（仮称）の検診機能や外来機能等については予防医療センター機能検討・建設実行委員会（仮称）を立ち上げ、早々に最終案を決定する予定である。北側跡地には慶應病院2号棟機能（主に内科系臨床教室）が移転する新たな臨床研究棟の建設が予定されている。第一ステップ計画棟Ⅰの竣工は平成二十一～二十二年が予定されている。第二ステップは、老朽化した慶應病院1号棟、2号棟、情報システム部・リハビリセンター解体後の跡地に新病院棟の建設である。最終的には中央棟、6号棟、7号棟も解体して新病院棟に移転し、現在ある新棟が老朽化した時期には解体された現在の6号・7号棟跡地に新たな新病院棟建設が可能になる。この新病院棟建設時に求められる基本構想は、患者中心の医療提供、医療関係者の働きやすい環境整備と業務効率化、全IT化、人口動態・疾患動態に見合った診療科再編、診療クラスター構想実現化、外来診療体制整備、最先端医療開発と実用化、再生医療・がん診療等の拠点形成、低侵襲手術推進、手術室・ICU機能拡充、臨床研究・臨床治験推進、危機管理・医療安全体制構築、そして〝心・技術・科学〟をバランス良く持った優れた国際的若手臨床医の育成である。この第二ステップ計画棟Ⅱの竣工は平成二十五～二十七年を予定している。

信濃町キャンパス内に予定されている事業が完成した暁には、創立一五〇年記念事業の基本テーマである「未来への先導」を医学部・病院一人ひとりが先頭に立って実行していく責任がある。そして夢がある。

〝慶應医学―次の百年に向けて……〟



イメージ図

「ヒトiPS細胞研究」拠点に
慶大、京大、東大、理研採択

新規多能性幹細胞「iPS細胞」を用いた再生医療の早期実現のため、文部科学省の研究整備事業が始動

文部科学省では、ヒト幹細胞を用いた研究を通して再生医療の実現化を目指す再生医療の実現化プロジェクトの一環として、ヒトiPS細胞等研究拠点整備事業の公募が一月から二月初めにかけて行われた。その結果、二月二十九日、慶應義塾大、京都大、東京大、理化学研究所を四大拠点研究機関に選んだと発表した。

iPS細胞とは、Induced Pluripotent Stem Cellの略であり、京都大学の山中伸弥教授によって開発された。

iPS細胞は、皮膚の繊維芽細胞や肝臓の細胞などの体細胞にSox2, Oct3/4, Klf4, (c-Myc)などの三～四遺伝子を導入するだけで、試験管内で誘導される。

また、同細胞は、胚性幹細胞（ES細胞）と同等の多能性（三胚葉性の細胞への分化能力）を有する幹細胞であり、患者さん自身の体細胞から簡単に誘導することができるため、ES細胞やクローン胚由来ES細胞の場合と異なり、受精卵の破壊や、クローン胚の作製なしに、体細胞を用いて樹立することができ、ES細胞並に様々な細胞を試験管の内で作ることが出来る。

しかも患者さん自身の細胞由来であるため、免疫抑制なしで移植できる可能性をもっている。このため、生命の萌芽に係わる倫理的な問題や他家移植に伴う免疫抑制の回避という二重の意味で、iPS細胞技術は、国際的にも大いに注目されるようになった。

二〇〇六年に山中教授が最初のiPS細胞に関する論文を発表して以来、筆者の岡野栄之のグループは、脊髄損傷を含めた中枢神経系の疾患の治療法の開発を目指して共同研究を行っている。また、福田恵一教授、松崎　有未准一男教授、坪田一男教授、独自に山中教授とのiPS細胞に関する共同研究を行ってきた。

このように我が国が先陣を切ることが出来たものの、現在では、我が国の研究グループと、ハーバード、MIT等の海外のグループの間で熾烈な開発競争が繰り広げられている。この状況を鑑み、文部科学省は、iPS細胞に関する研究を戦略的に進めていくための支援策を取りまとめた「iPS細胞研究等の加速に向けた総合戦略」を昨年十二月に発表した。今回のヒトiPS細胞等研究拠点整備事業も、この戦略の一環と考えられる。

今回、慶應が採択された課題は「再生医療実現化を目指したヒトiPS細胞・ES細胞・体性幹細胞研究拠点」（代表研究者・岡野栄之）であり、須田年生教授を始めとする世界に誇れる慶應義塾の幹細胞研究グループが、これまで培ってきた幹細胞研究に関する基本技術（分離、培養、in vivo実験）、インフラ（セルプロセシングセンター、細胞分離ユニット、動物用MRI等）を最大限に活用し、ヒトiPS細胞・ES細胞・体性幹細胞に関する自己複製、分化、エピジェネティックな制御機構や培養技術に関する基本的な理解を深めるものである。

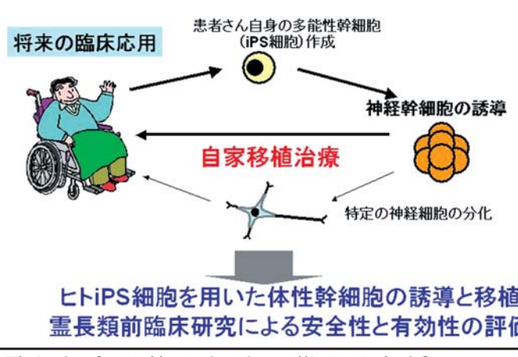
更にこれらの細胞を用いて、中枢神経系、造血系、心血管系、感覚器系の疾患を標的として、霊長類モデルを含めた世界トップレベルの前臨床研究の推進を行い、その安全性と有効性を確認し、再生医療実現化を目指すものである。

また、本拠点事業は、国立病院機構大阪医療センターや実験動物中央研究所と連携した計画であり、拠点内に閉じたものではなく、学内外の研究者に対して開かれたものとして運営したい。

iPS細胞技術は、単に再生医療のみに使われるものではなく、稀少な臓器内の体性幹細胞を試験管内で大量に調整する事が可能になるため、メタボローム解析、プロテオーム解析等の網羅的解析を可能にし、細胞の分化能と遺伝子のリプログラミングの研究や、ヒト疾患モデル細胞の提供による疾患の原因の解明や創薬研究に大きく貢献し、医学研究の大きなパラダイムシフトを産む出すものと期待される。

（岡野　栄之　生理62回）

学内外の研究者に対してオープンな運営により、様々な疾患における再生医療実現化を目指す



渡海紀三朗文部科学大臣がリサーチパークを視察

日本最先端の研究拠点に熱いエールを贈った一時間半

三月三日の午後、文部科学省より渡海紀三朗文部科学大臣が、信濃町キャンパスのリサーチパークを視察のために来塾された。

まずは末松誠医学部長と研究科長の岡野栄之教授との懇談の後、岡野研究科長の案内でリサーチパークのiPS細胞研究拠点となる研究室を視察に歩かれた。

渡海大臣は各研究室に入る度に、そこで行われている研究テーマに深く聞き入り若手の研究員に何度も質問をされたり、実際に顕微鏡を覗いたりされて、研究の現状と未来について興味深く対話をされた。途中、大学院生にも激励の声をかける場面も見られ、一時間半という予定を大幅に上回る滞在となった。

研究の広さと重さ、その質の高さとスタッフの数に比べて、フロアの狭さを大臣が指摘されると、岡野研究科長は「今後より充実した環境を整備しつつ世界に挑戦していきたい」とその意欲を語った。

東の慶應、東大、西の京大、理研が一体となって、iPS細胞による再生医療の実現を世界に先駆け達成していくことにますます期待が高まる。

鑑賞知来

よみうりランドのほど近くで生まれ育ちながらも生来のあまのじゃく故にアンチ巨人を貫き通してきた私にとって、名将藤田元司監督は憎たらしい野球人の一人であった。そんな彼が二年前に亡くなった。訃報を告げる夜のニュースで彼の座右の銘が紹介された。『やってみせ、言ってきかせて、させてみて、誉めてやらねば人は動かじ』。元はといえば、連合艦隊司令長官だった山本五十六の言葉である。

医学教育の現場はいま変貌を遂げつつある。最も大きな変化は、臨床実習が見学型から診療参加型へと移行していることだ。診療参加型実習で重きが置かれる項目のひとつが、学生の手技やプレゼンテーションの改善点を指摘するフィードバックである。アメリカの医学教育ではその導入部分は誉め言葉にするのが鉄則とされる。誉められた方が指導を素直に受け入れられ、萎縮することなく前向きに学習でき、学習効果が高まるという訳だ。振り返ってみると自らがそうした指導を受けた記憶がないので、日本の一般的な教育とは異なるスタンスということになる。

消化器内科の学生担当を任され、信濃町での教育にそんなアプローチが馴染むのか戸惑いを覚えるなかでの藤田監督の訃報。希代の名監督も意識して誉めることにより選手を育んでいたのであれば、と背中を押される形で全ての学生を誉めてみることにした。効果は期待した以上のものだった。藤田監督の率いていた巨人が少しだけ好きになった。山本五十六には尊敬の念を抱くようになった。

そもそも教育とは『学習者の行動に価値ある変化をもたらすプロセス』である。『価値ある変化』を『自発的かつ意欲的に学習するようになること』と捉えると、彼らの言葉は教育の本質を説いてくれている。あとは学習内容が適切となるように方向付けができれば理想的な教育ができるのではないか、とワクワクしながら『金の卵』を『金の鶏』へかえす作業に勤しむ毎日である。

（矢島知治　消化器内科　71回）